



写真3 P村の景色

P村を訪問したものの、農繁期であり村人はまばらだった（写真3）。この時期は、皆夜中まで働いているというので、インタビューをあきらめて引き上げることにした。2008年訪問時と同様に水田にはフィッシュトラッ

プがあちこちに仕掛けられており、家畜が村内を歩きまわる風景もあまり変わっていないかった。ただ、当時とは異なり、村のすぐ際までゴムや豆、トウモロコシなどの換金作物の栽培を目的とした農場が広がっていた。社会情勢の安定化が進むのと同時に、生計を維持するうえでの周囲の自然環境への依存度はもしかしたら低下しつつある最中なのかも知れない。いろいろと興味の尽きない地域である。

引用文献

佐々木研. 2011. 「安定化の進む国境地帯—ワンカー陣地からココ村へ」『アジア・アフリカ地域研究』10(2): 309-313.

現代トルコにおけるイスラーム学復興

—イスタンブールの教育ワクフ ISAR・EDEP の現場から—

山本直輝*

イスタンブールにおける「我々の文明の再興プロジェクト」

筆者は現代トルコのイスタンブールにおけるイスラーム学の復興について関心をもち、イスラーム教育を目的として設立された教育ワクフ（Eğitim Vakfı）を対象にフィールドワークを行なっている。「現代トルコ」と

「イスラーム学の復興」という2つの言葉の組み合わせは、トルコの歴史に詳しい方は奇妙に聞こえるかもしれない。なぜならトルコ共和国建国に続く父ムスタファ・ケマル・アタトゥルクの一連の脱イスラーム化改革の一環として、オスマン帝国の悪しき遺産と考えられたスーフィー教団の活動拠点であるテッ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ケ（スーフィーの修行場）に加えイスラーム知識人の再生産の要であるメドレセ（宗教学校）は閉鎖され、神学・法学・スーフィズムなどの伝統イスラーム学を学ぶ機会は失われているからだ。しかし、親イスラームの公正発展党（Adalet ve Kalkınma Partisi）が政権を担い、イスラームの信仰に厚い人々が活動しやすくなった現在、再びイスラーム学の中心地としてのイスタンブールを復活させようと試みるムスリムたちがいる。彼らはこの試みを「我々の文明の再興プロジェクト（Medeniyetimizi Ihya Projesi）」と呼んでいる。イスタンブールに住むムスリムたちによるこのプロジェクトはまだまだ始まったばかりではあるが、本稿では今現在進行形で進んでいるこのイスラーム学復興の現場を少しでも紹介したい。

教育ワクフ ISAR・EDEP

ISAR・EDEP は、前者は男子学生、後者は女子学生を対象としてイスラーム学の教育を目的として設立された教育ワクフである。ワクフは本来イスラーム法学では宗教寄進地を指すが、現代トルコではより漠然と NGO とほぼ同じ意味で使われている。「西洋と東洋の架け橋」との二つ名のとおり、イスタンブールはボスポラス海峡を境にして西（ヨーロッパ）側、東（アジア）側に分かれているが、ISAR はアジア側のウスキュダル地区、EDEP はヨーロッパ側のファーティヒ地区に存在する。どちらもイスラームの信仰に厚い人々（*dindar*）が暮らす地区として知られており、ナクシュバンディー教団と呼ばれる

スーフィー教団が住民に大きな影響を及ぼしている。ISAR・EDEP の設立運営に関してもナクシュバンディー教団系財団の強力な援助により成り立っている。

トルコでは、モスクでの子どもたちを対象としたクルアーン暗記学校や、スーフィー教団の導師の説教（*sohbet*）などを除き、イスラームの知の営みに触れる機会はほとんど失われているといつてよい。さらに、近代国家トルコ共和国を建設していく中で、アラビア文字を使っていたオスマン語を廃し、ラテンアルファベットで書くトルコ語を用いるようになったため、トルコ人はオスマン朝時代に書かれたオスマン語の文献や正則アラビア語で書かれたイスラーム学の古典にアクセスする力を失った。ISAR・EDEP の設立者であるレジェップ教授はこのような問題に鑑み、トルコに暮らすムスリムたちが再びイスラーム学の古典を読む力を取り戻すための教育施設として ISAR・EDEP を設立した。



写真 1 ISAR 校舎外観

また ISAR はアラビア語で利他心, EDEP はアラビア語で(善き)作法を意味し、共にスーフィズムにおいて尊ばれている徳目であり、彼らがイスラーム学教育のみならずムスリムの人格の涵養を目的に活動していることが分かる。ISAR は4年制, EDEP は5年制からなる綿密なカリキュラムが組まれている。入学試験はあるものの授業は完全無料であり、無料の食堂や寮も備えている。1年目ではアラビア語文法や会話、クルアーン読誦学等の授業が徹底して行なわれ、2年以降はアラビア語の古典を用いてハディース学や神学、法学等のイスラーム伝統学の授業を学生は受けることになる。またヨルダンへのアラビア語研修もカリキュラムの中に組み込まれており、アンマンのシャーズィリー教団というスーフィー教団がバックアップしているアラビア語学学校で1ヵ月間アラビア語の夏期集中講座が開かれる。

ISAR・EDEP におけるイスラーム学の授業ではイスタンブール大学、マルマラ大学などで働く神学部 (İlahiyat Fakültesi) 教授の他、ヨルダンを拠点に活動しているアラブ人の伝

統派ウラマーやシリアから亡命してきたイスラーム学専攻の大学生らが教師として活躍している。アラビア語の授業については、そのほとんどがシリア内戦により亡命してきたシリア人学生やウラマーたちによって行なわれている。また、ダマスカス大学の元学生が多いが出身地を聞くとほとんどがアレッポ出身者である。

特筆すべきは、ISAR・EDEP のイスラーム学の教授においてクルド系ウラマーが重要な役割を担っていることだろう。トルコ共和国建国後メドレセが廃止されたことは上述したが、彼らクルド系ウラマーの話によればクルド人が数多く暮らすトルコ南東部、特にディヤルバクルでは伝統的イスラーム教育が残存し、ウラマーたちが今でも数多く暮らしているという。彼らクルド系ウラマーはクルド語に加え、トルコ語・アラビア語両方を流ちょうに使いこなすことができ、シリアから亡命してきたアラブ人ウラマーとイスタンブールのトルコ人をつなげる架け橋となっている。

ISAR・EDEP でイスラーム学、特にイスラーム神学 (‘ilm al-Kalām) を教えているマアシューク教授はディヤルバクル出身のクルド人であるが、私が聴講した授業では見事な正則アラビア語で思弁神学の議論の土台となる「知識論」について教授を行っていた。思弁神学の授業ではタフターザーニーの『ナサフィー信条注釈』を教科書として用いていた。これはオスマン朝時代にもメドレセの神学テキストとして広く使われていたものである。神学の授業だけでなく、アラビア語の文法学の授業もオスマン朝時代に高い評価を得



写真2 ヨルダンでのアラビア語研修



写真 3 EDEP 校舎内

ていたビルギヴィー・メフメド注釈のジュルジャーニーのアラビア語文法書を用いるなど、授業ではオスマン朝時代に使われていたテキストを積極的に用いており、失われていたイスラーム学の復興を象徴している。

イスラーム学徒としての誇りを再び

EDEP の設立者のひとりであり、自身もアメリカの大学でイスラーム教育について研究しているエルバイラク教授はあるとき EDEP 設立の目的について私にこう話してくれた。「トルコのイスラーム実践を考えると、もっとも苦しい思いをしてきたのは信仰に厚い女性たちです。かつてこの国では…この国に暮らす人たちの大部分はムスリムであるはずなのに…信仰のために頭をヒジャーブで覆

う女性たちは高等教育の場にいることを許されず、非ムスリム世界であるヨーロッパやアメリカに行かなければいけませんでした。私たちはイスラームの実践を望んだがために、トルコから出ていかなければいけなかったのです。信仰を重んじ、知を求める若い女性たちが誇りをもってヒジャーブを被りイスラーム学を学べるような環境を作り上げるのが私の何よりの夢でした。」イスラーム学の授業の質の高さに加え、EDEP の校舎は内装も非常に美しく、食堂での食事でもなぜか男子学生用の ISAR での食事に比べ種類も豊富でかつ栄養バランスの整ったものが提供されており、信仰に厚い女子学生が快適にイスラーム学徒としての生活を送る環境が整えられている。

イスラーム学のルネサンスがもたらすもの

トルコにおけるイスラーム学復興の担い手たちが、自分たちの活動を「我々の文明の復興プロジェクト」と呼ぶとおり、彼らの目的はただ単にイスラーム学の知識を得ることだけではない。教育の現場ではトルコ人、アラブ人、クルド人がアラビア語という聖なる言語を通じつながり合い、利他心 (*isar*) に現れるような他者の尊重精神とムスリムとしての共同体意識を育んでいる。イスタンブルにおけるイスラーム学は、信仰と情熱に燃える若きムスリム学生と共に静かに、再び息を吹き返しつつある。